

平成28年度 あきたスマートカレッジ (報告)

Bあきた教養講座

B11～13：日本近代文学への招待 大正編

講師：秋田県立大学 教授 高橋秀晴氏

会場：秋田県生涯学習センター3階 講堂

【趣旨】北条常久シニアコーディネーター・高橋秀晴県立大教授・山崎義光秋田大准教授の3人の先生方による近代文学の講座です。明治期・大正期・昭和前期を代表する作家をリレー形式で取り上げ、時代をたどります。

講座記号	期 日	テーマ	参加者数
B11	8月20日(土)	大正編① 芥川龍之介 ～鬼才ゆえの栄光と挫折～	75
B12	10月1日(土)	大正編② 谷崎潤一郎 ～悪魔主義という快楽～	57
B13	10月8日(土)	大正編③ 『種蒔く人』～プロレタリア文学を拓く～	42
			合計 174名

高橋先生曰く、「最近アクティブラーニングというものが流行です」ということから、第1回目では参加者に『羅生門』を読んでいただき、第2回目では10分間で読んでから「感想」を述べていただき、第3回目では講座の初めに『種蒔く人』についてどのようなことを知っているかを参加者に問う、などと双方向性のある講義が展開されました。

ここでは、2回目の講座について報告します。

谷崎潤一郎のデビュー作に当たる「刺青」をまず最初の10分間で黙読し、参加者が感想を述べる、ということから講義が始まりました。「刺青」の内容を簡単に言うと、「刺青の彫り師の男性が針の痛みを苦しむ男たちをあざ笑い、街で足首を見て気に入った女性を探し続け、その女性をやっと見つけたところで、酒を飲ませて寝入ったところで一夜にしてその女性の背中に女郎蜘蛛の刺青を入れる」というものです。異様とか、怖いという感想があったのは言うまでもありません。「谷崎文学には、サディズム・フェティシズムといったものが織り込まれており、これを文学として取り上げることを『ハラスメント』と捉えられる時代がくるかもしれない。大正文学での谷崎文学の位置には確固たるものがあるのに、将来取り上げることができなくなるかもしれない。」という高橋先生の言葉に、皆一様に驚きがありました。「谷崎の文学の絶対性は、快楽の追求にある。だからこそ、このような異常とも思える小説を書いたのだ」という先生の言葉も非常に印象的でした。人間の本性とは、どんなものなのか。快楽とは何か。そもそも、それらをあらためて考えさせることが谷崎の目的であり、その目的性が認められたからこそ、谷崎文学を取り上げることが世間に許されているのではないか。様々なことを考えさせられた講座となりました。

